

## 九州方言の動詞の活用

迫野, 虔徳  
九州大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/9399>

---

出版情報 : 語文研究. 85, pp.1-11, 1998-06-05. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 九州方言の動詞の活用

迫野 虔 徳

一

国立国語研究所編『方言文法全国地図』(GAJ)の刊行によって日本全国の動詞活用の姿がある程度概観できるようになった。これを使って小林隆「活用の方言分布と歴史」<sup>(1)</sup>同「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」<sup>(2)</sup>同「動詞活用における一段化傾向の地理的分布」<sup>(3)</sup>、大西拓一郎「活用の類と統合—全国方言の動詞の活用の通時的対応と『方言文法全国地図』を通してみた分布」<sup>(4)</sup>など、全国の動詞活用の変遷を考えようとする研究が相次いで出されるようになった。大西氏は、「上一段類」「四段類」などの「活用の類」を設定し、その統合のあり方をもとに「系統」を考えようとする。アクセント系譜論などが想起される考え方である。この比較方言学的手法に対して、小林隆氏は、言語地理学的にたとえば上一段語「起きる」の各活用語形の全国の状況を調べ、その分布上の特色や語形間の新古の関係などについて分析を加えておられる。いずれも意欲的な取り組みで、今後の進展が期待されるのであるが、動詞活用の変遷については、また別の取り組み方もあるのではないかと思われる。特定の地域の動詞活用のシステム全体のありかた(構造)に注目する、一種の内的再構ともいうべき方法である。小林氏の指摘にもあるように、九州方言は動詞の活用に関して日本の方言の中でももっとも複雑な分布を見せる方言と言ってよいようである。このような複雑な分布がこの九州方言の中で形づくられた理由や経過を動詞活用の型の全体的なありかたから考えてみることはできないかということである。

二

GAJの動詞活用の分布図を見ると、九州地方の動詞の活用は他の地方と一線を画して、全体として一つのまとまった特色を示す注目すべき地域のように思われる。特にその感を強くするのは、「-e、-uru、-ure」のように活用する古典語のいわゆる下二段活用が根強く残存することで、このかたちは、他に紀伊半島に数地点あるだけである。その分布の中心は九州地方にあり、しかも九州では全域にごく普通に行われる一般的なかたちである。GAJの次の諸図(64図「開ける(終止形)」65図「任せる(終止形)」115図「書かれる(受身形)」116図「来られると(受身形)」117図「される(受身形)」118図「開けさせる(使役形)」119図「書かせる(使役形)」120図「来させる(使役形)」121図「させる(使役形)」125図「書かせられる(使役受身形)」)は、この下二段関連の地図で、いずれも次

の図1のような分布を示している。

図1

||||| 下二段  
==== 下一段



九州地方を中心に分布するこの下二段の形は、古い形を保存しやすい九州方言の一つの特徴的な例として一般には受け取られているように思われる。本居宣長『玉勝間』巻七「るなかにいにしへの雅言ののこれる事」に、よく知られた次のような記述がある。

ちかきころ、肥後国人のきたるが、いふことをきけば、世に見える聞えるなどいふたぐひを、見ゆる聞ゆるなどぞいふなる、こは今の世にはたえて聞えぬ、雅びたることばづかいひなるを、其国にては、なべてかくいふにやとひければ、ひたぶるの賤山がつかは皆、見ゆるきこゆるさゆるたゆる、などやうにいふを、すこしことばをもつくろふほどの者は、多くは見える聞えるとやうにいふ也、とぞ語りける。

肥後国人のことばに「今の世にはたえて聞えぬ、雅びたることばづかいひ」を見出して驚き喜んでいる宣長の姿が目浮かぶようであるが、今日でもこの宣長



古典語の上二段に対応する形も九州方言では問題が多い。GAJ には、上二段関連の地図が次のようにある。61 図「起きる（終止形）」72 図「起きない（否定形）」85 図「起きろ（命令形）」106 図「起きよう（意志形）」126 図「起きれば（仮定形 1）」132 図「起きるなら（仮定形 2）」。下二段の単純な分布に比べると上二段の方言分布はかなり複雑である。日本方言全体から見ても九州方言内の分布の複雑さは目を引くものがある。いま、古典語の上二段動詞の九州方言内での活用を大まかに整理してみると次の三つのタイプに分類できるように思われる。

- ① 古典語と同じ上二段の形を保存している地域。九州東北部に見られる。
- ② 上二段が下二段に統合されている地域。宮崎など九州東南部に見られる。
- ③ 上二段が五段に統合されている地域。主として九州西南部に見られる。

図3 上二段（古典語）（『九州方言の基礎的研究』による）

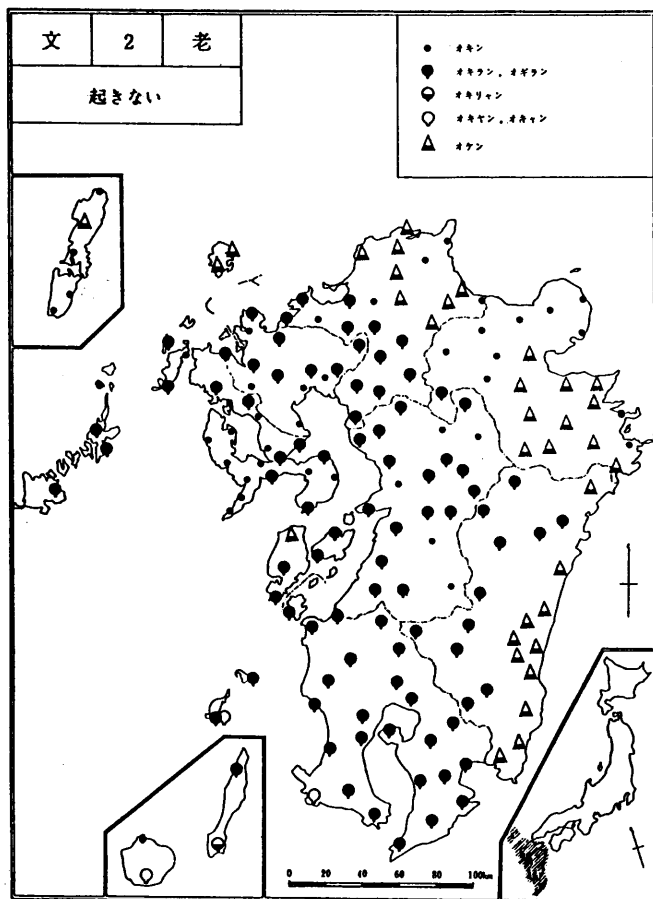


図3として『九州方言の基礎的研究』(九州方言学会 1969)から九州方言での「起きない」(古典語上二段の否定形に対応する形)の分布図を借りて概略その範囲を示した。①福岡県東部、大分県北半の旧豊前領に古典語と同じ上二段の形がそのまま行われている。図3の黒い点で否定形を「オキン」という地域である。ただし、福岡県東部には、三角形の「オケン」が記されているように、上二を下二に転じて「起ケン(起きない)」「起ケタ(起きた)」のように言うところもある。②大分県南半(豊後)宮崎県東部域にはその上二を下二に転ずる形が広く行われている。この地域では「起ケン、起ケタ、起クル、起クリャー、起キー」のようになるのが普通である。

意志形の「起きよう」(GAJ 106)を①②ともに「オキュー」、命令形の「起きろ」(GAJ 85)を①②ともに「オキー」と言うが、①の「オキュー」は「起きう(起きむ)」、②の「オキュー」は「起けう(起けむ)」の変化したもの(起キョー→起キュー)、①の命令形「オキー」は「起きよ」、②の「オキー」は「起けよ」の変化したもの(起ケイ→起キー)で、かたちは同じであるが、活用の類は異なったものである。なお、壱岐、対馬にも下二段化の傾向が若干見られる。

①②の九州東部を除いた③九州西南部地域は、古典語の上二段を五段に活用させる傾向が強い。図3の「●」で示された地域である。ただし、これも地域差が若干あるようで、長崎など西北部には「起キン」(否定形)「起キュー」(意志形)などの上一、二段的な形もある。図3に見るように長崎・佐賀・熊本などには黒点の「オキン」が併用されている。また、この地方には、命令形に「起キロ」の形がある。上一段、あるいは上二段であるにしても語尾の「ロ」は西部日本の方言としては特異である。西北部は、このように上一、二段的要素を残しつつ、「起キラン」「起キレ」のような五段化の傾向を示しているが、鹿児島などの西南部になると上一、二段的な要素は薄く、五段化傾向は一層鮮明になる。「起キラン(否定)、起キロー(意志)、起キリキラン(能力可能)、起キル(終止)、起キレバ(仮定)、起キレ(命令)」のように言う。

九州方言ではこのように古典語の上一段は日本のどこよりも突出して五段に転ずる傾向が強く、古典語の上二段は、下二にも五段にも転ずる。この奔放さは日本の方言の中でもきわだっている。こうした自由奔放さを容認しながら、一方では大多数の方言がとうの昔に捨て去った下二段活用を後生大事に守り続けている。このアンバランスは、どちらも極端であるだけによけいに気になるのである。九州方言の動詞の活用は、日本方言の中でもとりわけ複雑であると言われる。このような状態は何によってもたらされたのか。それを解く手がかりは、この超進歩的部分と超保守的部分を九州方言が合わせ持っていることの原因を考えるとところから得られるのではないかと思われる。

### 三

そのことを考えるために、まず九州方言の動詞の活用を全体的にながめ直して  
みることにする。九州方言の動詞活用は、変格（カ変・サ変）を別にして、変格  
以外の活用の型を分類すると、大きく次の二種三類に分けることができそうであ  
る（ナ変・ラ変は五段化していることが多いのでここに含める）。括弧の中に現代  
語の活用に含まれる古典語の活用の型を上げておいた。

(A)五段活用（古典語四段・上一・下一・ナ変・ラ変）

下二段活用（古典語下二）

上二段活用（古典語上二）

(B)(1)五段活用（古典語四段・上一・下一・ナ変・ラ変）

下二段活用（古典語下二・上二）

(2)五段活用（古典語四段・上一・上二・下一・ナ変・ラ変）

下二段活用（古典語下二）

(A)は、古典語上一、下一、ナ変、ラ変が四段（五段）に統合されただけで、古  
典語の状態をもっともよく伝えている。主として九州東北部の旧豊前領に行われ  
ている。(B)は、動詞の活用を五段と下二の二つに統合してしまったもので、(1)は  
上二を下二に、(2)は上二を五段に統合したものである。(1)は、主として大分県南  
半（旧豊後領）宮崎県東部に、(2)は九州西南部一帯に広く行われている。

(A)は、古典語の上一段を五段に統合するところが新しいが、おおむね古典語の  
活用に従ったもので、九州方言の保守的な面を示している。これに対して(B)は、  
古典語の活用段を大きく踏み外して方言独自の展開を見せたものが多く、注目に  
値する。(B)の方言に特徴的なのは活用の類に五段と下二の二つしかないことであ  
る。(カ変、サ変については、九州方言では大きな違いはないので、これは別にあ  
るものとして特に一、一取り上げない。以下同) 共通語などで重要な一類をなし  
ている上一段、下一段などの一段類は、この方言には原則としてない。古典語の  
上一段所属の語は「見ラン」「着ラン」「似ラン」のように五段に活用する。「起き  
る」のような上二段語は五段か、さもなくば下二段に活用させる。もともと古典  
語の下一段活用の「蹴る」やラ変の「あり」は早くから五段化していたから、結  
局この(B)の方言には、五段と下二段の二つの類しかないのである（ナ変につい  
ては、まだ保存しているところがあるが、五段化しているところも多い）。この五段  
と下二の二つしかないという現実は、どのようにしてもたらされたのか。ここに  
この問題のポイントがあると考えられる。

一体に活用の型式を統合してより単純なシステムにしようとすることは、それ  
ほど特異なことがらではない（活用語形の上にもこの単純なものへの志向はしば  
しば働く。形容詞活用の方方言形の中などにもその志向を容易に見出すことができ

る)。歴史的に見ても、古典語の九種類の活用が現代の共通語では五種類に統合されているなど、より単純な形に移行しようとする傾向があることは否定しがたいことである。

多くの方言では二段活用の一段化がこの型の統合に大きく寄与した。上下二段は、これによってそれぞれ上下一段に統合したのである。この二段活用の一段化は、四段などの母音の変化による強変化とは違って、「ル」「レ」などの膠着を本質とする二段活用の類が、その弱変化の性格を一層徹底させようとして起こした変化であると考えられる。それ自体は二段活用に内在する内的要因による変化で、活用の型の統合はその結果としてたまたまもたらされたものと言う事が出来る。ラ変の四段化も終止連体合一の大きな流れの中で、やはり結果として生じた型の統合である。これに対して、ナ変の四段化は、ナ変自体に原因して、結果として四段に統合することになったというより、「死ぬ、往ぬ」などの少数の所属語彙しか持たないこの類が活用の形によく似た勢力の強い四段に類推し統合して行ったと考えた方が考えやすいように思われる。型の統合をその要因の方から考えるといくつかのタイプがあるように思われる。

九州の(B)の方言が五段と下二段の二つの型に統合しているのは、どのようにしてもたらされたものか。二段活用の一段化のような内的な要因によって引き起こされた活用変化による統合なのか、ナ変の四段化のような他の類への類推が引き起こした統合なのか、この点がまず問われなければならない。そこで注意されるのがこの方言における上二段のありかたである。(B(1)の方言では古典語の上二段は下二に、(B(2)では五段に統合している。九州の方言で、上二段に何らかの変化が起こり、その結果として活用段が変わったというのであれば、五段になったり下二段になったりというようなことはまず起こらないはずである。これは、上二段に独自に発生した言語変化が原因となって結果的に引き起こした型の統合というより、相対的に力の弱い上二段が他の優勢な類に類推統合して活用システムの「単純化」を果たしたものというように見るべきではないかと思われる。

(B)方言の動詞の活用が五段と下二の二つの型になっているのは、動詞の活用を単純なものにしようとする方言的欲求が強く働いた結果であると考え、九州方言の動詞の活用の上に見られる一見不可解なさまざまな現象の意味もある程度理解がつくのではないかと思われる。(a)九州方言で古典語の上二段は一部の地域に残るだけなのに対して、下二段は九州全域で磐石の安定性を見せること、(b)古典語の上一段、上二段動詞が九州方言では五段化するという他の大方の方言を陵駕する活用段の転換を見せること、(c)古典語の上二段は一部にそのままその形を残す所もあるが、その他の多くの地域では五段にも下二にも大胆に転換すること、など、五段と下二を柱とする活用の型の「単純化」が九州方言で強力に進められたと考えれば、その現象の意味が理解できるように思われる。



(B)(2)方言地域の鹿児島方言を例に、その動詞活用に見られる特徴的な事実をあらためて数え上げてみると、次のようなことがある。(イ)「貸す」などのサ行五段動詞を「貸セ・貸スツ・貸スレ」のように下二に活用させる<sup>(5)</sup>。(ロ)古典語の上二段語は五段に転じる。「起キル」は、終止連体を見ている限りは単に一段化しているだけのものであるが、実際はラ行末尾音だけを「起キラン」「起キレ」のように五段に活用させている。(ハ)上二段の大方はこのようにラ行五段に転ずる一方で、「出来る」「落ちる」などは「デケタ・デクッ」「オテタ・オツッ」のように下二にも転ずる。鹿児島方言の動詞活用に見られるこのような複雑な型の転換は、結局のところ五段と下二を両極に、そのいずれかに帰属させようとする変化と見ることによってもっともよく説明されるように思われる。そして、この五段と下二を両極とする動詞活用の「単純化」は、鹿児島方言だけに限るのではなく、上に見たように九州方言に広く一貫して見られる傾向のように思われる。しかも、そのひとつの極に下二という古典的な形を据えているところからも予測されるように、この傾向は、九州方言内でかなり早くから進んでいた可能性がある。先掲の宣長の玉勝間の記事が下二の残存にだけ触れて上二の例を示さないことに意味があるなら、この時点ですでに五段と下二を柱とする「単純化」が相当な進展を見せていたのではないかと考えられる。また、以前、江戸時代の朝鮮語学習書である『交隣須知』に対馬の方言が反映していること、その日本語本文に一、二段動詞の活用の動揺が見られることなどを報告したことがある(『文献方言史研究』第六章第一節方言と文献批判—交隣須知の言語— 清文堂 1998)。それを再掲してみると次のようである。

- (1) 耘   クサトレハ   イネデモザクコクデモヨフデケル (巻二 28 ウ、農圃)
- (2) 疔   マメガアシノマタニテケレバ   ナンキニコサル (巻三 64 ウ、疾病)
- (3) 高卑   タカヒクヲワキマエズシテテケルカ (巻四 43 ウ、雑語)
- (4) 水獺   カワウソノカワハ   フユニモセンヲコシラエテ   ミチユクトキニキツテマイリマスル (巻二 8、走獸)
- (5) 擣   カツテツンダイネガヒツタラ   タタカセイ (巻二 28 ウ、農圃)
- (6) 紡車   クルマテイトヲヒケ   キモノコシラエテキロウ (巻三 20 ウ、雑器)
- (7) 箒   ヤハツガナケレバ   トウシテイロウカ (巻三 38、武備)
- (8) 太   アヲマメヲニテダシヤサレイ   マメヲニレイ (巻二 21、禾黍)
- (9) 隙   ノゾイテミレイ (巻一 16、方位)
- (10) 殊   フシンニアルカラアラタ□タツネテミレイ (巻四 37、雑語)
- (11) 閉   トチツテラケハキガデイデソノナカノモノガカビガネヨフ (巻二 49、宮宅)

(1)~(3)は、上二段語「デケル」を下二段(ここでは下一段、玉勝間「すこしことばをもつくろふほどの者は」〈先掲〉が参照される)に転じたもの、(4)「着て」

を「キツテ」(5)「干たら」を「ヒツトラ」(6)「着む」を「キロウ」(7)「居む」を「イロウ」(8)「煮よ」を「ニレイ」(9)(10)「見よ」を「ミレイ」のように上一段語を五段に、(11)「閉ぢて」の上二段語を「トヂツテ」のように五段に活用させたものである。上一段語は江戸時代すでに五段化しており、上二段語は下二（ここでは下一）あるいは五段への動揺を示している。これもまた、現代見るような五段と下二を柱とする活用の「単純化」が進んでいたことを示しているのではないかと思われる。<sup>(6)</sup>

九州方言以外の多くの方言では、二段活用の一段化などによって〈結果的〉に活用の型が整理統合されて行ったという面が強いが、九州方言では、このような自然な型の統合を受ける前に、方言としての「単純化」への強い欲求が働いて、活用の型の再編に動いたように思われる。九州方言には、明確な形では二段活用の一段化の形跡はない。九州東北部の(A)の方言は一段化とはまったく無縁であることは言うまでもないが、(B)(1)の方言も二段活用を保っていたために上二段と下二段の交替が容易に行われたと考えられる。上二段と下二段が「-uru、-ure」の形を共有しており、先にも触れたように上二段の意志形、命令形は、方言的な訛りによって下二段のそれと同じ形になる。両者とも二段の形を保っていたとするとその違いはそれほど大きくはない。動詞活用の中で勢力の強い五段と下二段に活用の型を「単純化」しようとする方言的な欲求が強くなると、位置が不安定になった上二段が下二段に合流しようとしたことは容易に想像できる。福岡県東部は、(A)方言の一部として、古典語の上二段の形をなお強く残す地域であるが、ここには同時に下二型も併用され、上二段が容易に宮崎などの(B)(1)式の方言に転じ得ることを示している。

(B)(2)の古典語の上二段を五段化していった方言は、結果的に活用語尾の一つ後ろのラ行音に移し、その前は語幹部として一つ形に固定してしまっただけで、出来上がった形から見れば、一段化の後、ラ行五段化を果たしたように見えないことはない。しかし、(B)(2)の五段に類推する方言域には、「クル・クレ」の上二段的な形を痕跡的に残しているところもあり、必ず上二段語の一段化が先行していたと言えるかどうか疑問である。九州方言には、活用の型として数え上げられる形で一段の形はないということもこの際考え合わされるべきである。小林隆氏は、この地域の五段化の原因をなしたものとして、この地域に同時に行われる「起キロ」などの「ロ」を使う命令の形との関連を疑っておられる（先掲「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」）。「起キロ」が「起キレ」という五段的命令形を生み出したのではないかと言うことである。活用の型の統合の圧力の中で、この「起キレ」の形が他の活用形に波及してやがて五段への統合をはたしたということは十分考えられることである。上二段の形から一段化の過程を経ずに直接「起キレ」「起キラン」の形が生み出されることは十分可能である。九州方言は、

共通語などとは違う方法で活用の型の「単純化」の道を辿ったのではないかと思われるのである。

#### 四

九州方言は、共通語などとは違う方法で動詞活用の「単純化」をはかっているとすると、その方言的事実を中央語の歴史叙述などにそのまま援用したりするのは適当でないことになる。九州地方の広い範囲に下二段活用が残っているのに対して、上二段活用は九州東北部のごく一部に見られるだけという方言的事実から、従来、二段活用の一段化は上二段に早く生じ、下二段はそれにやや遅れたという解説が行われてきた。<sup>(7)</sup>しかし、九州東北部以外の上二段活用の残っていない九州のその他の地方には、上一段の一段化した形が行われているわけではない。上述のように、九州地方には、いわゆる二段活用の一段化は一般的な形では発生していないのではないかと思われる。古典語の上一段、下一段は、すべて五段に転じているから、九州方言には型としての上下一段自体がない。このような方言での分布を一段化現象の解釈に用いるのは適当ではないであろう。

九州以外に和歌山県にも上下二段活用が幾分残っている。GAJ 61 図「起きる（終止形）」では和歌山県の十二の調査地点のうち五地点で「オクル」が報告されているのに対して、64 図「開ける（終止形）」では「アクル」の形が二地点報告されているだけである。ただし 115 図「書かれる（受身形）」121 図「させる（使役形）」など付属語の類は「カカルル」「サスル」の下二段の形がそれぞれ四地点報告されている。ここでは、古典語の上下二段活用を残しながら徐々に「一段化」を進めているようである。上二段の「オクル」の方が下二段「アクル」の地点数をわずかに上回っているが、しかし、わずかこれだけの少ない調査地点、調査語彙から、上二段と下二段の一段化の早い遅いを判断するのは困難である。ただ、和歌山県方言には型としての一段の形があり、九州方言のように一段化現象との関連の有無から疑ってみる必要はないように思われる。

蜂谷清人氏は、狂言台本の二段活用の一段化を調査されて、上二段の一段化の例が見当たらないことを指摘されている。<sup>(8)</sup>蜂谷氏は、このことから、下二段は所属語彙が多く、それだけ使用の機会が多いはずだから、一段化はむしろ下二段が先行したのではないかという意見を述べておられる。検討されてよい提案であると思う。

以上、九州方言の動詞の活用には、活用の型を「単純化」しようとする志向が早くから顕著に働き、それが現在の複雑な九州方言の動詞活用を生み出しているという試案を述べてみた。

## 注

- 〈1〉小林隆「活用の方言分布と歴史」『ことばの世界』北海道方言研究会叢書第5巻 1994.12
- 〈2〉小林隆「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」東北大学文学部研究年報 第45号 1995.3
- 〈3〉小林隆「動詞活用における一段化傾向の地理的分布」『日本語の歴史地理構造』明治書院 1997
- 〈4〉大西拓一郎「活用の類と統一全国方言の動詞の活用の通時的対応と『方言文法全国地図』を通してみた分布」1994年11月12日第219回都立大学方言学会配布資料 科研報告『日本語方言活用の通時的研究序説』1995.3による
- 〈5〉上村孝二氏は、終止連体の「貸ス」を「カスッ」と発音するところから、「貸スル」の意識が生じ、下二に転ずるようになったとされる。「九州方言の概説」『講座方言学』9 1983. このことは、下二が安定した活用の型であったことも無関係ではないであろう。佐土原果「鹿児島(市)方言動詞の粗描」(国語学31 1957.12)にも、鹿児島方言の動詞は、カ変とサ変を別にすれば、五段活用と下二段活用の二つが中心をなすという指摘がある。
- 〈6〉比較的早く、二段活用の一段化が及ぶ以前に独自の活用の「単純化」を進めていたために、その柱の一つに下二段のような古典語と同じ形が選ばれ、そして一旦選ばれたこの形は、構造の柱をなすものとして簡単に改廃することができなかったものと思われる。単に古い形が「残存」しているだけの存在ではなかったと思われる。
- 〈7〉奥村三雄「所謂二段活用の一段化について—方言的事実から史的考察へ—」『近代語研究第二集』1977
- 〈8〉蜂谷清人『狂言台本の国語学的研究』第四章「狂言古本に見られる一段活用化の現象」笠間書店 1977